私の和歌山への提言

～キレイな夕日がなくならないように～

ガニインドラン　ライノー　ラジ

（マレーシア・システム工学部三年生）

今まで日本の色々なところへ行く機会があったが、和歌山が一番落ち着く場所である。考えてみれば、私が和歌山に来てからすでに３年間以上経ちます。ずっと和歌山にいるのは偶然ではなくて、必然だと思っています。仲間が多く、周りの人々が温かく、和歌山は、ここに居れば居るほど、私の居場所になると感じています。

和歌山に初めて来たときに、御坊という紀州中部にある駅に着きました。なぜなら、和歌山高等専門学校はそこにあって、そこで３年間を過ごすことになっていたからです。初めは、ここには何もない！ここで本当に暮らせるか？と不安を抱えていました。御坊駅に着いた時に、迎えに来た先生に不安な顔を見られてしまいましたが、先生は「大丈夫だよ、ここには日用品が全部揃っているし、十分いい生活ができるよ」と私に向かって言ってくれました。その時、「冗談じゃないよ！この何もない田舎で大丈夫な訳がない」と心の中で強く思っていました。

３年間が経つのは早かったです。振り返ってみると、その先生が言った言葉は、一つも間違っていません。文句ばかり言っていた自分は贅沢でした。バスの本数が足りない、電車が少ない、遊ぶ場所が一箇所しかないとか色々言いましたが、あくまでも少ないということで、ないということではありませんでした。私が言いたいことは、高専に居た３年間は、本当に楽しかったということです。

（和歌山高専図書館の夕日）

高専は海が近くて、記憶に残っている多くの思い出の中では、漁船が夜に一線になって、きれいな光を照らしながらイカを獲っている姿が最も鮮明な記憶として残っています。悲しい時、淋しい時、いつも星空とお月さんが友でした。海を見ながら、波を聞きながら、全ての心配がなくなっていきます。

インターンシップは日高振興局でしました。その時、椿山ダムとか、色々なところ行きました。気が付いたのは、和歌山にはたくさんの緑が残っていることです。北山村や古座川町は95%以上森林に覆われていて、とても貴重なものであると思います。

高齢化が進み、過疎町村の数も多くなっています。一時キレイであった農村風景がどんどん消えています。行政が一生懸命に伝統を残そうとしています。大正や昭和時代建てた住宅や建築物は長い歴史を持っているが、整備や保護する人々もいなくなる手前です。若い世代が和歌山から出て行って、誇るべき梅や蜜柑の産業を譲り受ける人が少なくなっています。

和歌山はとても複雑な場所ですが、改善できるところが多いと思います。高野山は一つの例であって、有名な観光地で多くの人が集まる場所であります。高野町はとてもきれいな町で、若者達が営業など支援すれば、人口が増える可能性が高いと思われます。湯浅町も観光地として活躍できるもう一つの場所だと思います。和歌山県のPRが一番大事なことだと思います。

私のテーマ、「キレイな夕日がなくならないように」というのは、夕日を見る人がなくならないようにという意味です。和歌山では、永遠にキレイな夕日が残り、すなわちきれいな自然がなくならない多くの場所があります。しかし、地域の活性化が進まないとその自然を楽しめる人がいなくなります。

(野島の近くの堤防からの風景)